

且之を多治見町へ奪はれし結果、土岐口の蛙目粘土を財源とし陶業方面へと轉じ、町民協同して事業を勵みし結果一大工業區と變り年々發展の有様は驚く程である、然るにその財源たる蛙目粘土も漸く終りを告げんとしてゐる、之が原料供給問題は目下の急務である、幸にも原附近に豊富なる蛙目粘土が発見されたりとはいへ、

土岐口蛙目粘土を最も有効に利用することが陶業者の務であると思ふ。

擱筆に當り御校閱を賜はりし元地質調査所技師清野信雄氏、御援助を與へられし岐阜縣陶磁器試驗場長井深拾吉氏、森川土岐津町長及び土岐津小學校訓導三宅勝美氏に深謝す。

甲斐御勅使川扇狀地近傍の諸問題

川 手 軍 造

氷河遺跡に就いて

元來本扇狀地近傍の市ノ瀬臺地、龍岡臺地等は興味ある存在であつた。市ノ瀬臺地は古甲府湖（私は甲府湖の存在を現世まで持續されたと信ずる故化石湖と呼ばない）時代の三角洲であらうとか、古扇狀地であるとか、又はそれらが

傾動作用をうけたものだとか、岩錐だとか、龍岡臺地は八ヶ岳の泥流による集塊岩であらうと主張されてゐた。

しかし右のいづれかとした場合、次の矛盾が生ずる。

A、市ノ瀬臺地

第一圖 御勅使川扇狀地近傍圖

地球

第二十三卷

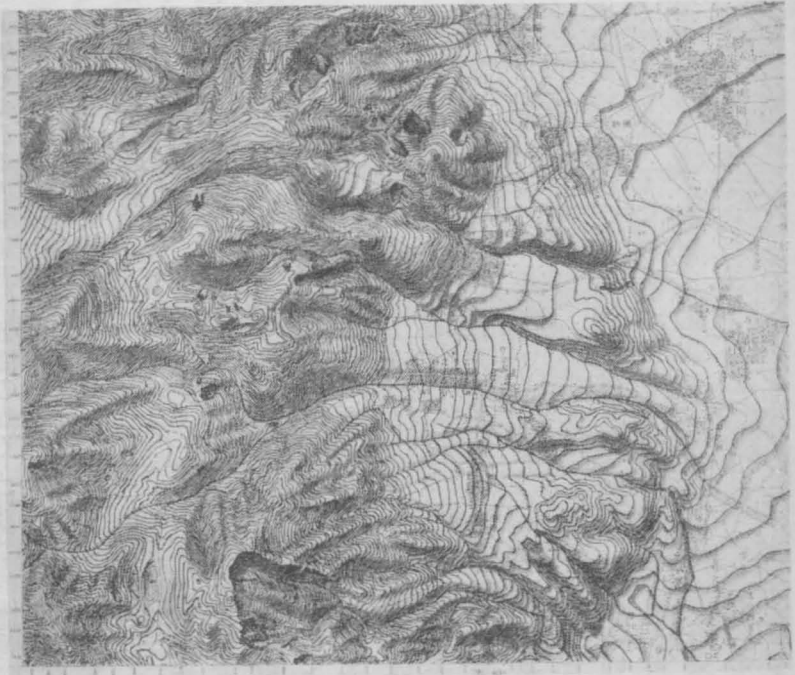
第二號

三六

四四



第二圖 市ノ瀬臺地近傍



甲斐御勅使川扇狀地近傍の諸問題

一、流水の堆積物とすれば、山麓近く大礫が多くあり、漸次細くなつて末端に及ばねばならぬ筈である。

二、流水の堆積物は普通水平層が多く、各々その地層の含有物も特長があるべきである。

然るに末端に寧ろ大礫が多く、粘土砂をもまじへ塊狀層である。

三、岩錐とするには規模があまりに大で、且、亞角礫・片圓礫等が不合理である。

四、傾動地塊 (Tilted block) と考へると洪積層であるからそれ以後のものとみねばならぬ。

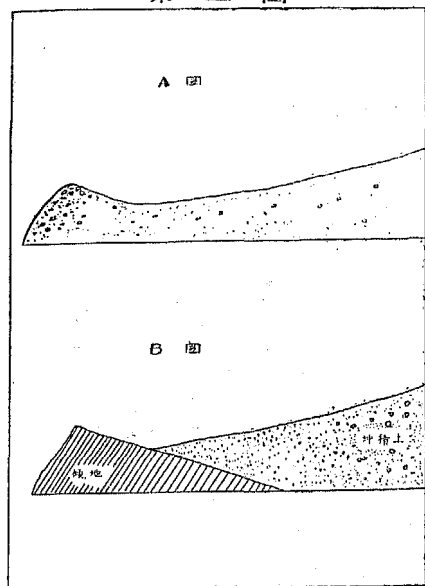
然るに之等は第三圖 A 圖の如く全く角のとれた圓丘阜で、これより寧ろ古いと思はれる、房總・相南の本地方より風化作用の大であらう海岸地方の Tilted block の如く角張らず、全々感

じを異にしてゐる。又第三圖B圖の如く Tilted block の背面に沖積土、又は洪積土が堆積したと考へてみても地層の關係から前述一、二、の矛盾はまぬがれない。

B、龍岡臺地

龍岡臺地及その延長、羽根の臺地を八ヶ岳泥流とするには、八ヶ岳火山の活動を無視出来ない、少くも富士にも優つたであらう八ヶ岳の雄大な Konide が現在の如き風貌を呈するに至る

第三圖



期間の長いことは、他に特種の條件を見出さぬ限り何人も是認せねばなるまい。地史的に考へて日本の火山活動は若い筈だし、あれ程に尖頭を呈するといふことは不思議である。泥流の集塊岩といはれる本臺地は指頭でも崩れ落ちる程粗鬆な洪積層で、而かも Loam を混入してゐる點、少くも Loam の堆積中か、又はそれ以後のものともねばならぬ。Loam の堆積前とみれば少くも 3m—10m の Loam の層が地表を被つて居ねばならぬ。勿論これが水其他の營力によつて除去されたものでないことは次の事項でもその凡ては窺はれる。

本臺地の地表には極めて薄い火山灰狀のものと、その下には白色粘土の堆積があるのである。又この Mud Flow が山體構成後の突發的事變による大爆發 (Explosion) によつたものとしてもその末端が隆起した圓丘をなしてゐたり其他不合理の箇所が多い。

又 Mud Flow が Tilted したものとしても甲

府盆地の周邊に同一地形が相當存在してゐる以上、全部同一視することは難い。又前述の八ヶ岳の風貌であるが短期間にあの見事なA字峯形成は氷河の營力によつたものではないかの疑問は日本に氷河の認められた現在、地形學を學習したものでなら氷河に關心のない人にしろもつ苦である。

即ち前述の幾多の矛盾は之を氷河地形とみる時は容易に説明出來得るのである。

氷河堆土なる故に兩者共、先端がゆるやかに盛り上り、圓頂をなしてゐるのである。且つ塊狀層で、末端に大礫が多く、同時に砂利・木材・Loam の混入もある譯である。

御勅使川扇狀地の構成

本扇狀地は日本としては規模も割合に大で形も美しく、標式的のものとされてゐる。

しかし東南部に等高線が流れ、東北にゆがみを生じてゐる點、東大の村田理學士が疑問をもたれてゐる様であるが、このゆがみは前述の龍

岡臺地に阻止されたことが一つで、武田信玄は氾濫常なき本川の勢力を二分して、この臺地の末端に堰入れ、釜無の流路に當て、水を以て水を制したのである。今の流路は即ちそれである。ゆがみの第二は本扇狀地の先端を絶えずかすめとる釜無川の營力である。本川と釜無川は姉妹でありながら本扇狀地構成の爲には絶えず争闘を續けたものとみうけられる。この争闘は氷河前からであらうが、それは割愛してそれ以後を考研してみたい。

小川博士の八ヶ岳氷河は本域をも被ひ、甲府湖も氷河湖と考へられる、しかして羽根及龍岡臺地はその當時の側堆積及端堆土であらう。氷河前釜無川は本扇狀地の頂點に近い地方を略々徳島堰の流路に添つて流れた時代もあるらしく、その當時古扇狀地の大部は流失し、大平・築山・飯平等の基部の一部を遺した、この證として飯平・築山には厚い粘土層の露出がある。これは御勅使川の流路と略々直角をなす地點で

あるし、又古扇狀地としても頂點に近い處であるから、かゝる粘土の堆積はある筈はまれであらうし、又、地形からみても、いづれの時代か釜無川の流路となつた事があるともうけられる。

氷河の最盛期には入ヶ岳氷河と本御勅使川氷河とは合流し、次の後退期には現扇狀地の340mの等高線邊を端としてApron 狀を呈し、又それより低い等高線の處々には、通退の途次残したDrumlin が散在して居たであらう。この時代は相當長く續き、次に急激に後退したと想像せられる。

その理由は荒れ川 (Wildbach) の雄である御勅使川の氾濫原である本地方に、奈良朝、又はそれ以前から聚落が相當發達し、扇頂に近い有野部落を除く外は古部落と認めるものは殆んど340m—310m 又はそれ以下の弧線上に限られ、その中間部落の大方は鎌倉時代以降發達したものである。これらの古部落の多くは水田文化でなく、乾田文化の生活を現代迄續けて來てゐる

のである。これらの古部落が飲料水にもことかき、且危険極まる氾濫原に何故住居したか……？私は恐らくこれらの古部落は氷河堆土の麓、又は頸部に居を卜したものと考へる。

現在その地貌は殆ど窺はれないが、これは狂的な大氾濫をなす本川の浸蝕と堆積の兩作用に加へて、地盤隆起と、尙之に供ふ原傾河の頭部浸蝕によつて表面の堆積物は除去、又は埋没が完全にされたものと考へられる。

西野の東北の果樹園の道端に漂石とみられる大石が三四除かれずにみうけられ、寺部の入口蠶神及其の附近の庭石等に漂石らしいものが多く使用され、且、この邊は特殊の丘陵性の地貌を呈し、一般に石が多くみうけられるは勿論、この中には釜無川から人工的に運ばれたものも勿論ある。

要するに本扇狀地の構成は氷河前の古扇狀地と釜無川の堆積物及氷河の堆土、その上に沖積扇 (Alluvial fan) を被つたものである。しかし、

その沖積は主として治水の進んだ、織豊時代前でその後の大氾濫は少く、現流路と用水堰による堆積が、天井川地貌をなして見事に發達してゐる。

この外山麓には小河川による堆積が複合的にこの構成に參與してゐる。

本扇狀地近傍の氷河遺跡

A、御勅使川溪谷

本溪谷は珍らしく緩傾斜で、入口の築山下(480m)から上荒井澤合流點(980m)まで約8200mの距離に對し、高度の差は僅か510mに過ぎず扇狀地を行くより少しく困難だけで途中に堆石土さへなければ釜の邊まで自轉車で行けさうである。即ち U Valley で、兩岸が切り立ち樹木がなければ頗る見通しがよい、それ故山脚は殆ど氣がつかず、所謂切斷山脚(Truncated spur)である。

この溪谷の堆積物は間歇的で大礫があると思ふと細砂といふ状態が何度か繰返されてゐる。

これは氷河の後退中の靜止期を示すものである。但し、他に近代の砂防工事に起因されたものも幾分はみうけられる。この谷の側面はなめらかで、この渠を溯上ると50mもあると思はれる袋狀の岩壁即ち袋谷(Trogsschluss)がある。被ひかぶさる様な弧狀の岩壁で本當に釜の中に入つた様で、擦痕のある大岩石が累々として物凄しい。尙前述の間歇的大石のことであるが營力の大きい本川のことであるからその凡ては保存されては居ないが、今尙、支氷河の合流點とみられる附近に階段谷(Riegel)の痕跡がみられる。即ち須澤・駒場の連續線がそれらしく、又新倉附近にも認められ、最も見事なのは、金山澤及萩澤外、二三の氷河の合流點にあたつてゐる瀬戸で、小屋程もある大岩石が重疊し、それに接した上流に氷河湖・古蘆安湖の遺跡がある。この湖は傳説によれば、唐松峠まで續いてゐたといはれ瀬戸に接した地點には現在十三層に亘る粘土と砂利の水平層が、二三十米も露

出し、底部の粘土層は厚さ不明な程の深層で、埋没木材の露出もみられる。本川の浸蝕はこの邊まで進んでゐ、尙進行しつつある如くである。

湖は瀬戸を押切り、甲府の東方まで氾濫したことが記録にみえる。これらは堆積・地塊運動・浸蝕其他の合成的のものであらう。

懸谷 (Hanging Valley) の遺跡は多く、その明瞭なものを下流から擧げると大嵐及須澤である、勿論この邊は階段谷の時代もあつたらうが、大嵐は小規模の端堆土の形式が忍ばれるゆるやかなうねりによつて先端が少しく隆起し、その

築山・太平の臺地の基部は古扇狀地か河岸段丘であらうが前述大嵐と同じく Boulder clay の堆積がみられ、この延長は福王寺まで續いてゐる。

B、市ノ瀬臺地及その背後

尖端は開析されて居るが、その頸部からは氷河乳 (Glacial milk) なる白色粘土 (Boulder clay) の堆積があり、須澤はその先端、神社の邊に堆石の群がみられる。その外蘆安附近はこの遺跡

市ノ瀬臺地は市ノ瀬川其他の河川の營力が御勅使川程大でない爲、その中央部を開析したのみで見事な氷河地形が現存してゐる。

が多く急坂をよぢ登るとその中途に多くの平坦部を見出す。萩平の空地等その尤なるものである。勿論、これらは地塊運動の營力も作用したであ

本臺地の圓阜・狸岡・上野山・物見山を連續させ、開析前の地形を想像すると三ヶ月形を呈し、端堆土の標式的のものであると領ける。

あらうが地形からみて氷河が作用したものであることは領かれる。本地方が隆起したことは種々の點で是認出来る、そして河川は何度か若返り、甲府湖を干し、天長二年四月、蘆安の氷河

この背面には高尾・立沼・稻名淵・城山空地・平井盆地等の珠數狀連鎖がある。この一帯は階段斷層の一平面であることは田中啓爾氏と同様であるが斷層の逆碎帯であるとの説は肯定出來兼ねる。之は前輪廻の山麓面が隆起して一段階を

作りそれが氷河作用により Karling されその前に端堆土の堆積をみ、それが消失後の風化と堆積によつてやゝ形の崩れたもの故、複雑な地貌を呈してゐるのであらう。

これらの多くは過去に水をたへ、Scotland の小湖 Corrie 又 Wales の山地に於ける Owm に相當するものとみられる。

上宮地・曲輪田にも端堆土は發達して居たであらうが、御勅使川又は釜無川等にその頭部を浸蝕されたものであらう。

青野等懸谷の遺跡ではないかとみうけられ市野瀬臺地の下にある小臺地は、氷河の末端から出る河流氷河堆積物 (Fluvio glacial deposit) であるらしい。

この附近の現小溪谷は氷河渠の一方に偏して浸蝕され V, Valley を呈してゐるが、盆地の中央から望むと一望に見通され氷河渠の特徴を示してゐる。

C、龍岡・羽根臺地

この臺地の堆積は八ヶ岳氷河のもので側堆石か又は後退期に於ける端堆土で、この延長は南方曾根の丘陵にまで及ぶらしく、何れも前述のものより大規模で對岸の鹽崎の同一地形もこれの連續とみうけられる。並崎も勿論之と同種であらうが、單限外として割愛した。しかし本臺地は白粘土の廣い分布もあり木材、大石等の埋没も相當あり、市ノ瀬臺地より興味ある存在である。

眞葛の高森山(丸山)は大正天皇の御野立所であつた爲、開拓の鍬が加へられず、錯痕、あざやかな大石の群が、保存されてゐる。

そしてその堆石がそのまゝ、記念碑に利用されてゐる點等愉快である。踏査の際、その見事さに思はず歎聲が洩れた位で、その西方の小丘にも同様大石の群がみられる。

若尾に近い權現山は西方の小氷河の端堆土らしく、その岩石によつてみうけられる。

氷河の最盛期には、Snow line は好條件の旭

村邊は700m邊にあつたらしくKarらしい地貌の線がみられる。しかし小盆地、小湖が900m邊の線上に多數みられる故、この邊の雪線持續期間が最も長かつたものではないかと思はれる。

次に急激に後退し、1100m—1200m邊となつたもので、兩者とも河川の源が多く、小規模な樺池・萩平・釜等の小カールの遺跡が見出せる。

本地方の氷河は山麓型(Fied mount type)が一番長く、雪線が低かつた爲、又本邦の氷河存續期間の短かつた爲、高山の山頂は完全にA字峯とするに至らず消失したのであらうが、蘆安

炭礦民俗誌小稿

(一)

山口 彌一郎

邊からは相當にA字峯がみうけられる。
前述の如く、Loamの成因も氷河と密接な關係を有し、小川博士の説の如く間氷期の風成層で、黄土も同種のものであるまいかと思はれる。

この外甲府盆地の周邊には相當な氷堆土の分布があると地形・古記録等から想像せられる。西方白峰山麓の青蘆・大柿等もこの種のもではないだらうか。五日市砂礫層等も面白い研究題目だと思ふ。(完)

(人文地理の問題は次の機會にゆづる)

六、採掘と搬出

石炭採掘に就いて古文献に見えてゐるのは單

に『掘る』と言ふことで筑前國續風土記の「山にもほる」。和漢三才圖會の「人掘取之」。雲根志